

ウグイスは何故、

春にさえずり始めるのか？

石居 進

鳥学ニュースの巻頭言を書かせていただくのは、かなり面映ゆかった。私は鳥学会の会員ではあっても、鳥学者とは言いがたいと思っていたからである。

それなのに、あえて鳥学ニュース編集担当からの御依頼に答える気持ちになったのは、日本の鳥学の裾野をもっと広げて新たな分野を包含しようという山岸会長の意気込みに打たれたからである。ほかにも理由がある。研究上で長年、鳥類と親しんできたことや、鳥類の話が私の講義の大きな部分を占めていることにもよる。しかし、それ以上に中村(司)先生、森岡先生、山岸先生、樋口先生、柿沢先生など鳥学会の錚々たる会員の方々に、色々な面でお世話になってきていることが大きい。さらに、東大の石田健さん、山階鳥研の岡奈理子さんなど、もう少し若い世代の方々にも、随分お世話になっている。上野動物園の福田さんと和光大学の今西さんのように、色々と助けて下さって一緒に研究をして下さっている方々もある。このように鳥学者の方々とおつきあいしていると、私もいつの間にか鳥研究者の一人になったのかなという気がしてきて、ついに執筆をお引き受けしてしまった。

私の講義はしばしば、「ウグイスは何故、春にさえずり始めるのか？」という問いかけから始まる(私の研究もここから始まっていたのであるが)。この簡単な問いに対して納得のいく答えを出すのは容易なことではない。日が長くなったということを感じ取る機構から雄性ホルモンによるさえずりの中枢の支配機構に繋がる、生体内情報伝達機構を完全に話さなくてはならない。これには膨大な数の研究が隠されている。すなわち、ウグイスの夜飼いの話から、最初に長日が精巣の発達を促す原因であることを科学的に証明したカナダのRowanの研究、有名なHamnerの光周期変化認識機構の研究、鳥はどこで光を感じているかという色々な研究、さらには脳が直接光に感じるという、日本の加藤勝先生や本間運隆先生の研究など、沢山の興味深い研究の紹介をすることになる。そして、次には光などによる脳神経の興奮がどうして脳下垂体の生殖腺刺激ホルモンの分泌を引き起こすのかということが問題となる。この問題について述べるには1925年のSharrerの神経分泌学の始まりとなった研究から、ノーベル賞に輝いた1970年代初頭のShallyやGuillemineのグループによる生殖腺刺激放出ホルモン(GnRH)の化学構造の決定の研究を紹介することになる。鳥類のGnRHの精製と構造決定は群馬大学医学部の五十嵐正雄教授のもとで宮本さんと長谷川さんの手でなしとげられたことは日本人として嬉しい。さらに、鳥類の生殖腺刺激ホルモンの化学構造は、私の研究室と三菱生命科学研究所の東中川先生の研究室との協同作業で始まった鳥類生殖腺刺激ホルモン分子cDNAのクローニングに関する一連の研究で明らかにされた。生殖腺刺激ホルモンは何故生殖腺に作用することができるのか、いいかえれば何故ほかの器官には作用しないのかという問題にも触



れなくてはならない。そこでホルモン受容体に話しが入っていく。ここでも嬉しいことに東京大学理学部動物学教室川島誠一郎教授の研究室で行われた赤染君、朴さん等のウズラ黄体形成ホルモン受容体分子のcDNAのクローニングの研究がある。このようにホルモンとその作用の関係といった、分子生物学的な問題も語られるのである。

また脳下垂体や生殖腺の機能を正しく理解するには脳下垂体や生殖腺がどのようにして出来てくるかという、発生学的知識も必要である。そして、精子形成、卵形成、排卵や排精といった生殖腺の機能、また生殖腺から分泌される雄性ホルモンや発情ホルモンなどの性ステロイドの化学構造、生合成、生物作用などが紹介される。これらの性ステロイドホルモンの作用のうちの重要な一つとして攻撃行動や性行動の支配がある。ここで、ついにさえずりと繋がる。脳の雌雄差で有名になったさえずりの中枢支配の話はここで出てくるのである。

このように「ウグイスは何故、春にさえずりはじめるか」という問題を話そうとすると、いつの間にか、現代の生物学の色々な分野にわたって話さざるを得なくなるのである。この簡単そうに見える問題の背後には、現代生物学の広い分野での学問の進歩が隠されているのである。

さて、この広い生物学の色々な分野の知識を身に付けるのはかなり面倒なことである。しかし、自分で強い好奇心と、しっかりとした問題意識を持てば、普段、馴染みのなかった分野のことでも何とか少しでも理解することが出来るようになる。

生物体はorganismと呼ばれているように、色々な機構が有機的に繋がった構造である。したがって、ある生物現象を理解しようとする、生物学の色々な分野の知識が有機的に繋がっていないければ本当の理解が困難なのである。この困難さを打ち破るのは自分で強い好奇心を持って問題を捕まえていることが、必要なのではなからうか。

このようにして広がった知識を元に、次の問題を考えると、そこには一層興味深い意義のある、そしてより普遍性を持った研究が広がってくるに違いない。行動学や生態学の研究者の方々も、生理学、生化学、発生学、分子生物学などについてのより深い理解があれば、より一層興味深い素晴らしい生態学や行動学の研究が現れるに違いない。その逆も言わずもがなである。

(早稲田大学教育学部生物学教室)

国際鳥学会議 in ウィーン

第21回国際鳥学会議 (IOC) は、1994年8月20日から25日にかけてオーストリアのウィーンで開催された。第1回の会議はなんと前世紀に、やはりウィーンで開催されたとのことで、会場には市の中心部にある王宮 (国際会議場) があてられた。ヨーロッパの古都ウィーンの王宮とあって、会場は外見のみならず内部も威風堂々たるものであった。その一方で、設備、運営面では従来の大会に比べてやや雑な面もみえた会議であった。

今夏のヨーロッパは日本同様猛暑とのことで、会議中もウィーンは暑い日が続いた。参加者は登録だけで1400名のマンモス会議で、従来の会議に比べ東ヨーロッパの研究者の参加と発表が多いのが目についた。54テーマのシンポジウム、多数のポスター、60テーマ以上のラウンドテーブル、それにフィルムセッションが、中休みの日もおかず朝から夜までぎっしりとつまったすし詰め会議でもあった。

伊藤基金による派遣で参加された4名の方々とそれ以外の2名の方々に印象記を寄せていただいた。

第21回国際鳥学会議：私の独り言

大庭照代

(期待) 私の最近の研究対象は、鳥類の音声や行動に限定しないで、広く自然の音について景観生態学の立場から、試論を行なうところにある。ウィーンでは、その結果を鳥類の音声の位置づけとしてぶつけようと思って、5分間の口頭発表つきポスター講演を試みた。

(寂しさ) 1987年にユトレヒトで開催された動物行動学会の経験では、同様な発表に短い質問時間があり、意見交換の場として非常に効果的であった。しかし、ウィーンでは発表のみに限ったためか、旧王宮の謁見の大広間の暗闇のせい、発表したらその発表者はさささと退場という始末であった。

(ため息) 私自身の理解に未消化な部分があったことは認めるものの、またそうであればこそ少なくとも何人かの人に出会い、研究の紹介や話をしたい、という望みはかなわなかった。さらに運が悪いことに、景観生態学関係の基調講演(Ranjit Daniels 景観生態学と南インドの鳥類の保護)も、ラウンドテーブルディスカッションもキャンセルされた。そして、その理由はオーガナイザーの誰に聞いてもわからなかった。

(感激) 旧王宮の隣の国立図書館では、毎日古い鳥類学の書籍を学会のために特別展示し

ていた。私は学会会場の喧噪を避けて、グールドの「ヒマラヤの鳥」を温かみのある光の中でじっくり見ることができた。さらに、道路を隔てた自然史博物館では鳥ばかりではない貴重な展示や映画を見ることができた。時間が十分にあったら、多くのタイプ標本からなる収蔵庫も見なかった。

(ぎっしり) 5日間、しかも午前8時から午後10時過ぎまで、約10会場に詰まったシンポジウムやラウンドテーブルディスカッション、さらに会期前半と後半にわかれたポスターは、超人的な能力と体力の持ち主のみが生き残る場であった。私が国際学会に行く大切な理由のひとつは、専門にとらわれず新しい鳥学の流れを知ることであるが、今回はとくに、記憶の行動生態学、知能の進化、さえずりと脳と行動などについてのシンポジウムが興味深かった。このあたりのことを勉強する機会を日本の鳥学会の国際セミナーではぜひやりたいと思った。

(エクスカージョン) トルコのイスタンブール周辺で、渡りを中心に2週間じっくり鳥を見た。2500mのウル山、マルマラ海の砂丘、シュバシコウの休む湿原、そしてごみ捨て場まで様々な環境をこなしながら、独米仏イスラエルの研究者と交流を持てたことは、学会とは別に特記すべき経験であった。

(千葉県立中央博物館)

国際鳥学会議の印象

佐藤 恵

シンポジウムとポスターは6つの分野に大別され構成されていた。ポスターでは、それぞれの分野が更に3~7の項目に分類されてお

り、私は「形態学・生理学」の中の「内分泌学」に申し込んだ。従来と比べ、内分泌の分野を含めて生理学のシンポジウムやポスターが非常に増えたという話を聞いており、今回初めて出席した私には分からないが、なるほ



国際鳥学会議の会場となった王宮

どとうなずけないこともなかった。1970年代後半から鳥類内分泌会議という国際会議が開かれてきているが、この会議の主要なメンバーのうち、純然たる家禽学の分野を除いた多くが出席していたように感じられたからである。

当然、シンポジウムやラウンドテーブルも様々なテーマで開催されたが、“Field Endocrinology”が一つの分野を占め、討論の中でも普通の用語として用いられていたことが印象的であった。この言葉は10年程前に初めて聞き、飼育されている実験用の動物だけでなく、自然の中の生物を知らなければ生物本来の姿は分からないという考え方を教えられた。この分野の論文は決して少なくはないが、このような認識を持つ研究者で会場が埋まるところを実際に見ると、研究者の意識の変革の大きさを強く感じさせられた。

あえて日本語に置き換える場合には「野外内分泌学」あるいは「生態内分泌学」などと言

われるField Endocrinologyのそもそもの提唱者はワシントン大学教授で本会議のプログラム委員長を務めたJ.C.Wingfield博士だと聞いている。勿論今でもこの分野の旗手であることに変わりはない。あちこちの会場を飛び回り活発に議論している同博士の姿は、名前を知らなくとも出席者であったならば誰もが目にしたことと思う。

鳥学は様々な研究分野を含んでいるが、生態学や行動学の分野の研究者が圧倒的に多いのは、参加者の内訳から見て日本でも外国でも大きくは変わらないだろうと感じた。しかし、この大会に従来と異なり幅広い分野の研究者が集まったと言えるならば、それは単に時代のすう勢だけでなく、Wingfield博士の強い意志が何らかの形で働いた結果でなかったかと、勝手に思いこんでいる。

(日大・歯・生物)

サギ類のラウンドテーブルから

成末雅恵

IOCに参加することは、もし伊藤基金がなかったならば、私にとっては夢の夢でしかなかったかもしれない。なぜならヤドカリのように家を背負った女性が、単身で外国に出かけるためには、よほどの事情が必要と思われるからである。幸福の切符を握りしめて、濱尾氏と共にオーストリアの空港に降り立ったときは、緊張で胸がキュンとしたほどである。しかし、会議前に参加した東アルプスのエクスカッションは、IOCの楽しさの序曲であった。いつのまにか気持ちにゆとりが生まれ、一つでも多くのことを吸収して帰りたいという心境になっていったように思う。

今回の会議は、サギ類のラウンドテーブルが行なわれたという意味でも、私にとって好運であった。フォーマル、インフォーマルなものも含め合計4回にわたって、世界のサギ類の個体数の変化や生息環境の保護などについて熱心に報告や討議が行なわれたのだから。第1回目は、夜の8時から王宮の奥の間で、Hafner氏のフランス流英語で穏やかに始められた。最後には、約25人ほどの参加者全員が

自己紹介をしあったが、その中にはサギ類の研究で著名なKushlan氏や、日本からの参加者の東條氏の顔ぶれもあった。帰りしな、Ardeola environmental servicesのLansdown氏に、「あなたの研究をもっと知りたい」と言われ、翌日一緒にランチを食べる約束をした。

次の日、私は一応持ってきた別刷りを出して、埼玉県で調べたサギ類のコロニーの変遷や水田整備にとまうサギ類の減少などについて説明した。予想以上に熱心に聞いてくれた彼は、来年Hafner氏やKashlan氏が中心となって、サギ類のワーキンググループが出版する「サギ類の保護」という本の中に引用したいと言ってくれたのだった。サギ類のワーキンググループには、世界各国から約200人の研究者や保護活動家が参加していると言う。また日本におけるサギ類の生息状況や、研究者、保護活動家などについて、もっと知りたいという要望が強かった。そこでこの紙面を借りて、興味関心のある方は国内のサギ類ネットワークへ登録をお願いします。下記宛に名前、住所、電話(Fax)、(EメールのI.D.)、研究や活動内容を示すキーワードを日本語と英語でお寄せください。

〒150 東京都渋谷区南平台15-8

(財)日本野鳥の会 研究センター

成末雅恵

Tel 03-3463-8862 Fax 03-3463-8844

(I.D.) PXP10344 @niftyserve.or.jp

(日本野鳥の会 研究センター)

口演付きポスター発表はおもしろい？

浦野栄一郎

今回の会議は、私にとって初めてのIOCであり、また初めての海外での国際会議だった。規模の大きさや鳥学全体の中での各分野のバランスの良さ、質の高いプレナリー講演などは、前回参加した人たちから聞かされていたとおりであった。

目新しかったのは「口演付き」ポスター発表である。希望者には自分のポスターをアピールするための、スライド3枚以内、3分間の口演が許された。ポスター発表は関心をもってくれた人とじっくり討論できる利点があるが、見てくれる人の数に限りがある。この欠点を補うのが短い口演、という訳だ。わざわざウィーンまで出かけるのだから、できるだけ多くの人に聞いてもらおうと、私はこの形式を選んだのだが、この点では期待はずれであった。ポスター掲示2日目の昼休み直後という時間設定も災いして、「行動」部門のやたら広い会場に聴衆は30人余り、しかも半数以上は

私と同様、自分の順番を待つ発表者だった。とはいえ、3分間一本(?)勝負というのは、各演者の個性や発表技術の巧拙が露骨に現れ、なかなかおもしろい試みであった。

自由集会「ヨシキリ属の繁殖戦略」には、ヨーロッパの同業者との情報交換と交歓を期待して参加した。私を含め2時間で10人が発表という過密なプログラムのため、おもしろい発表があっても、質疑応答の時間がほとんどとれなかった。この不満は懇親会でいくらか解消されたが、全体に日程が過密な国際会議で、その場に応じた「ほどよい」人数を求めるのは、一種の贅沢だろうか？

不満ばかり並べてしまったが、もちろん、収穫もいろいろあった。昨秋の就職を機に研究テーマを大きく変えた私にとっては、関連分野の動向を知る上でもよい機会となった。派遣助成をいただいた日本鳥学会伊藤基金に深く感謝するとともに、私よりも若い世代の会員に対しては、この制度を積極的に利用しよう強く勧めたい。

(農業研究センター)

得難い充実感

濱尾章二

行く前は不安で一杯であった。初めての国際会議、初めての海外旅行。しかも、補助金をもらって行くのに語学力、発表内容とも国際会議で通用するものか自信がない。最後には、自分自身のためになるように積極的に行動すればよいと腹をくくって出発した。

ポスター会場では、当初から予定のウグイスのものと共に、現在調査しているコヨシキリのポスターを並べ、自分の似顔絵も貼っておいた。おかげでスゲヨシキリを研究しているポーランドの研究者が、コヨシキリは繁殖システムが似ていると声をかけてくれた。論文で名前を知っていたドイツのシュルツハーゲン博士は見上げるような大男で、ハシボン

ヨシキリとウグイスの社会構造を比較しようとがっちり握手してくれた。(帰国すると、詳細な質問のファックスが届いていた)。英語の聞き取りにはかなり困難を感じたので、シンポジウムなどは事前になるべく要約を読んでおき、前の席で集中して聞くようにしたが、間違っって講演者控席にすわって笑われたこともある。

帰国後、何人かからもらった別刷りを読み、手紙を書き、別刷りを送るのに半月ほどかかった。現在も約束した別刷りが届きつつある。しばらくは、会議の余韻で刺激が受けられそうである。

つくづく行ってよかったと思う。ただ聞きに行くのではなく、自分の発表をもって学会に参加することで得られる情報の多さ、刺激の強さ。得難い充実の日々であった。数年に

に一度、国際会議に参加し発表できるように、勉強し調査したいと思う。

補助金を交付して下さった学会と、いろいろな機会に励まして下さった会員の皆様に紙面

を借りて御礼申し上げます。私以上に若い皆さんもどんどん参加して発表して下さい。

(浦和市立南高等学校)

貴重な体験

堀田昌伸

IOCの前にイギリスのノッティンガムで開かれた国際行動生態学会議 (IBEC) にも参加したので、その会議の印象も含めIOC参加の印象を述べたい。

8月13日に大阪空港を飛び立ち、成田経由でヒースロー空港に向かった。初めての飛行機、初めての海外一人旅ということもあって最初は緊張したが、旅の終りには国内旅行と大差ないという印象を持った。ただし、言葉というとても大きな壁を除いて。

8月14日から20日のIBECでは、3会場で約180の口頭発表と230のポスター発表があった。第4回大会に比べると少ない傾向にあった (No.45参照)。おそらく、その前後にIOCを含む大きな国際会議があったためだと思う。鳥を対象とした研究は約4割と最も多く、私にとって興味あるものばかりであった。しかし、婚姻システムや親による子の世話などの分野では、猫も杓子もDNAフィンガープリント法でちょっと辟易とした。私は「一夫一妻のヒメアマツバメにおける配偶者交代・(Mate Switching)」についてポスター発表した。渡航以前にコンタクトをとっていた人を含め、つがいの絆に興味を持っている人が見に来てくれた。会場は市の中心街から離れているため、さぼり癖のある私も遊びに行くこともできず、朝から晩まで厳しく充実した日を過ごした。

IBECで一緒だった永田さんとともにウィーンに移動しIOCに参加した。会場はウィーンのある王宮で、約750のポスター発表、250の口頭発表、その他に数々のラウンドテーブルがあった。鳥に関するあらゆる分野の人たちが集まるマンモス大会で、IBECとはえらく雰囲気の違い、4年に1度の楽しいお祭りという印象を得た。私も大会や会場周辺の観光でリラックスして楽しんだ。しかし、私の興

味ある分野の発表はすでにIBECで見聞きしたものが多く、少しがっかりした。また、発表プログラムが整理されておらず数冊に散在していたのには閉口した。宿舎は一番安いところを頼んだため、路面電車に乗って20分以上と遠かった。ある朝、ドナウ川の早朝探鳥会に参加するために、朝4時半に起きて集合場所の会場まで1時間以上かけて歩いた時はさすがにまいった。私は「Experimentally induced infanticide in older paired little swifts taking over costly nests」についてポスター発表した。また、アマツバメを研究している人のラウンドテーブルがあり、私も参加し自己紹介した。ただ、この分野は現在でも巣や卵など発見することさえ難しい種があり、行動や生態的な面について研究している人は少なかった。

会議終了後、インスブルックやコウノトリの繁殖地ルーストに行ったりした。9月2日にウィーンからロンドンにもどった。翌日、オックスフォードに行き、アマツバメの卵落としについて研究しているヘイウッド氏に会い、いろいろと話をした。エドワードグレイ研究所の収蔵物などを見せてもらい、最後に、ラック博士がアマツバメを研究し今も彼が研究している博物館の塔に案内してもらった。中は、「Swifts in the tower」に出てくる挿し絵のままであり、当時とほとんど変わっていない印象を受けた。もう9月だということにまだ巣立ち間近のヒナが私を待っていてくれた(?) のには感激した。今回の旅行で、数人の研究者とコンタクトをとることができたのは、私にとって貴重な財産になると思う。伊藤基金を設立された故伊藤先生や私を選んでくれた人にはすばらしい旅行をプレゼントしてくださり大変感謝しています。

(大阪市大・理)

学術集会のお知らせ

ツルシンポジウム・・・ツルの現状と保護・研究への展望

開催日：1994年11月26日（土）

場所：北海道釧路市北斗 東北海道地区国立公園・野生生物事務所

参加費：無料

概要：ツルの研究・保護に係わる方々からツル類の現状や保護・増殖・調査研究の成果について発表していただき、今後の保護活動のあり方を様々な角度から検討します。

講演予定者：日高哲二（日本野鳥の会）、古賀公也（阿寒町教育委員会）、佐羽尾加奈・富山奈美（帯広畜産大）、志村良治（釧路市動物園）、藤巻裕蔵（帯広畜産大）、正富宏之（専修大学北海道短期大学）、松尾武芳（タンチョウ保護調査連合）、百瀬邦和（山階鳥類研究所）

お問い合わせ：〒085-02 北海道阿寒郡阿寒町 阿寒町公民館

阿寒町教育委員会社会教育係 古賀公也（シンポジウム発起人）

TEL：0154-66-2222、FAX：0154-66-2223

第13回日本動物行動学会大会

日程：1994年12月2日（金）から4日（日）

場所：大阪教育大学 柏原市旭ヶ丘4-698-1

参加費：3,500円

懇談会：4,500円

お問い合わせ：〒582 柏原市旭ヶ丘4-698-1 大阪教育大学

第13回日本動物行動学会大会事務局内

TEL：0729-76-3211、FAX：0729-76-3269

第24回国際行動学会議

1995年8月10-17日にハワイのホノルルで第24回国際行動学会議（XXIV International Ethological Conference）が開催されます。2月15日までに申し込みをすると参加費が少し安くなります。発表申し込み締め切りは3月15日。参加したい方、興味のある方はSecond Circularを、至急、下記までご請求ください。

Travel Planners, Inc

Suite 150. GPM Building

San Antonio, Texas 78216-5674 USA

TEL：210-341-8131. FAX：210-341-5252

お知らせ

【用語委員会】

動物学関係の学術用語については、文部省の「学術用語集・動物学編」（1954,1988増訂）がある。しかし、鳥学の専門用語の多くはこの学術用語集からもれていて（特に初版では鳥学用語はまったく無視されていた）、鳥学関係者用の用語集が必要であった。その要求に答えるために、用語

委員会が1987年に発足し、一部の委員からは原稿が提出されていた。しかし、諸般の事情で、用語委員会の仕事は停滞していた。

今年の大会時に、あらためて「鳥学用語集」の取り扱いが検討され、まとまった原稿から順次、日本鳥学会誌に掲載してもらうことになった。手許の原稿も調整や見直しが必要で、すぐに印刷

お知らせ

というわけにはいかないが、来年4月以降の学会誌から連載できればと考えている。

言うまでもなく、学術用語の安定と普及は科学の発展の基盤であり、科学教育にとっても不可欠である。したがって、用語の選定・普及の仕事は、学会の事業として高い優先度を与えられるべきであろう。折角用語委員会を発足させながら、仕事が停滞していたことに委員長として責任を感じているが、来年度には成果の一部をお目につけられる筈である。なお、鳥学用語集がまとめれば、懸案の鳥学辞典も実現が期待できるであろう。

(用語委員長 森岡弘之)

【基金運営委員会】

○1994年度津戸基金による鳥学シンポジウム補助金は、古賀公也さん(阿寒町教委)から申請のあった「ツルシンポジウム—ツルの現状と保護・研究への展望—」へ交付されることになりました。このシンポジウムは11月26日(土)、釧路市北斗の東北海道地区国立公園・野生生物事務所で開催される予定(詳細は7ページ参照)ですので、都合のつく方は遠慮なくご参加下さい。

○本年度鳥学奨学賞については、当学会評議員および編集委員の推薦をもとに書状等による審査の結果、学会誌42巻2号に「餌および採食環境に応じたコサギの採食行動と採食なわばり」を発表された山田清さん(新津第五中学校)を授賞候補者に決定いたしました。その後、10月8日に開かれた評議委員会に申請して承認され、正式に今年度の受賞者に決まりました。祝意とともに、山田さんの今後のご研鑽を心から期待いたします。

(基金運営委員長 正富宏之)

【事務局】

○来年度から永年会員の制度がなくなることにより上越大会で決まりました。高齢会員数が増加し、会の会計を圧迫するのが理由です。ご理解をいただきたいと思います。ただし本年度までにすでに会費免除になっておられる会員の権利は今後も保証されます。

○銀行金利の低下から各種基金の利子が減り、基金の運営に支障を来しています。小口でも結構ですから寄付金を募ります。

○来年の大会は9月に東京の早稲田大学で本号の巻頭言を書かれている石居進教授を大会委員長として開かれます。

○さらにその次の年の大会は沖縄の予定です。沖縄の探鳥を楽しみましょう。そのために今から貯金をしておいて下さい。

○また沖縄大会は、国際鳥学セミナーの年にあたります。外国人講師の招へいについては、東大の石田健氏が中心になって推進していただくことになりました。ご意見・希望がありましたら、早めに同氏までご連絡下さい。

○鳥学ニュースの編集が次号から江崎保男さん・西海功さんのコンビに変わります。堀田昌伸さんご苦労さまでした。

鳥学ニュース No.53

1994年11月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会学研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522

発行人 山岸 哲 印刷所 鶴丸二印刷

編集 江崎保男・堀田昌伸